娘太閤記操早引

四編

下

へ13
4449
12

A13
4449
12

娘太平記第四編巻之下

東都　松亭金水編次

第二十一回

荏土ならぶ隅田川とも見紛ふべし。こゝは鎌倉江瀬川。その往昔八大河ふーて。海より汐の入けまぶ。西行法師こゝ来て。

浦ちかき磯上が原の葛くず
うき瀬の川の汐干ぞまち

新うん詠ごらまーそ。今も口碑に残りけり。歌も更け

さてうるさの刹那岸辺を通る行屋船。舳をきりくと張らせて
漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。中うへの六人圓居して。唯一ぐらに彩船を
岸の方へ寄せうとすると。女とぐ。
さてうねどの夜の船は四辺も寂く物淋しきに。唯うけられて船
中の人数を辨ずて寂寥こと。峯の方を指と見まば廿二日の
月しらもて山の端を辨くいと。その容形は定らぬら
ねど。若き女の只一個賤しうぶる風信うて文まうどぞ
船をうへ着てお呉成ョ浅生ぐらう。どうぞお侍ごト

浅ましてほねどの不便なり。まづその
容を問んとて。毋て水掉をもつて直ち。岸へつけまば脱しげ
なる。容をみれば所人走りて来て。私は。些況ぶあ川てとくまで
逃出して跡うう追ふのかうるものぞ。どうぞ。船方のお情で。船へ
隠してお呉なさいトいひつゝ船人まんとうを。船底へ隠て
船人。左様ぐ。筋のよろう隠しても上やうぐ若も浅で
船ぞうの。数多ぐ。ちやア迷惑ぐらう。手沢を出言葉女
レサ。黙まうと遣ひるョ。況ん内ゆうと言ふ。ア。船して居ふ。

聞もなく表ト身體豆腐粉〳〵ゆゑそこ浮ゐ人ゐ人鬼もあらぬ
浮世ゐ表ゐうう　松〳〵そそんうう、まん中せんうを遠ざめつつう
時ゐト港抜ど峯へさーつくまど女ハ歌びゑ飛まそ　女〳〵ヤ皆さん
四色うまくト完ゐ光のてまゐ所へ産ー。物うでおろーて浸をうる。
この時　松の中ゐる人月の光ゐ透ー見て「ヤおゑ〳〵ハお松がう
ぎやうわんう　まく〳〵ゐ　お茶さんハ八百屋のまたさんでござゐまゐ。
ちゐふお茶さんがお主をさらーふ美ゐま　ゐつまゐん減ゐ嫌
まうどざゐる　まゐト歌ぶお松ど顔を見て　またいよー〳〵ゐ害つ。

半〳〵お茶どうも今時ゐまゐ形をーてちゑ人ゐる生ハわど。
合点ど住わ人。モシ万一狐狸ゐまゐハ汗臭の代ちのどゐわう。
ゐ左右ゐうぶ人数で牛捕ゐーて親物ゐ出まどうぐト
ほゐハ言へど戦慄財をちうて白眼つゐまど。傍の人ちの言
ゐつ〳〵左ゐとゐーて狙伏んと肩をいーふー財をとること時
お松ハ宅ゐうーて　松〳〵　お茶さんどゐアまゐるゐんどゐいません。
成程　お茶ゐが左右ゐ作のハ些も主人のうへ所ど。実ハ
這度でどゐへまゐト彼茂八ゐ誘まて。砂浦へ仕ぶーて。

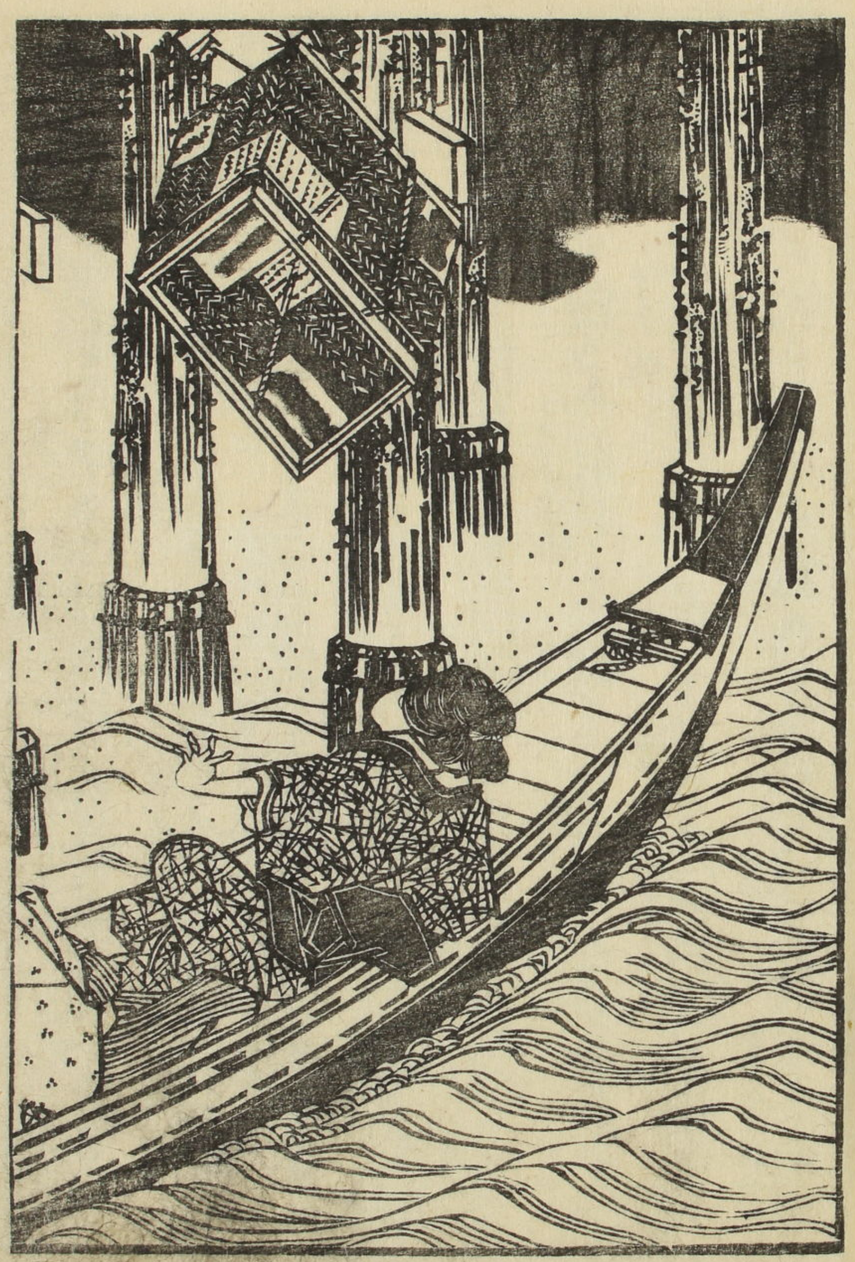
中き宅食人伴八是まで支ゝ浅八簡様〳〵と一伍一付を細ゝ不伴
支でもう仕様しても飯しませんうゝ宵ゝ〳〵おもの是酒を
強て。寝して。寝て近半しまゝ〳〵ゝ遅八初まび真時で何
所を行程ゝ神谷て来て見まびこの川端道を聞こゝ
人八居ば。支ゝもう怖人ゝて。どう高ゝと思ゝ〳〵所。私ゝ来さ
かゝ先刻の事ゝ不怪ゝけこのでございまゝト国で泳〳〵安堵八
するど案ゝ相違の最八ゝ道ゝ聞ゝる拳動をゝ〳〵情〳〵お
松を懐〳〵半六八烟草ゝつけるゝゝ半イヤもう是を切さ奴ゝ。

ゝ〳〵支ゝ為ゝ詮方ゝゝある。今夜八自己ゝ宅へ同伴不
仕ゝ〳〵 松 宅ゝ私しゝ焼しゝ〳〵ゝ八ゝ〳〵ゝ。
私の方でとゝ。ゝ程ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。
善さゝ。ゝも此所で逢ゝ八思ゝ〳〵ゝ 松 左程ゝ真正に
左程でございます。然しても茶屋。今夜八行所へ出ゝ
たんでございます。半今日八かし樹合ゝ〳〵ゝ大磯まで往さ
所ゝ〳〵ゝ遅〳〵ゝ〳〵。是非泊ゝて往と言さけまゝ扱
他と違ゝて。ゝ古地へ泊ゝて見ゝ。ゝ事をして様ゝ〳〵ゝ往さ

うを思へまるのも船長ざるふ。出さうけさ所がサア縛ろうて一足も
出わわくうふ。松ものしまを合船でこの川の脇へ出さのサ　松ヨ左様で
どざいまするエト　喇しものふ住ふのこへ渡せしー大樹の下へ
きまりしーものわうふ上でハ磯しー人の青空庫と寝しー歩さふ
置うこけハ多鮮ねどハ六人の手ひうるべし。時ふ此方の橋子
ようを船を見づけて飛ひうふ宝ふ人と船中ふ人と猪き猪ぎて
立うる所しも船へざうしうこと。落うを見まび人うハあびいと
古びうる破蒲鉾を縄りて降ろと縛せしーうう。船ハ鑪の

方へ出こと除て橋を視上　船ヲイあぶれハ分をまるんさ流のう
お客ざふふ。怪我をさせ申うしうこうる森しーいサとんまて待
て住ト橋の役へ船さしー寄せて。見まび手所うる人ハ六
左へ載しふうて一人も居ふざまび。船ハまと頼ふふしー
船へ行ざ船の中へ捨物ちて。行先へう住さのうつまれ出ざ。
見つやア様ふしいうの蒲鉾川へ歩捨て住ぶうトのうの
縄へうまうけて門へ投んとしうるうを縄の井と断まび。
船へ屋ふ屋ふ重てうアア。此中ハ分ざうふト元うう壊し

海中の奇遇
邪正を
ものす



づら
菩薩の姿。ままとば中より洗ひ出る白はだ栗毛の女の雲髪
さえ乱まとて肩ふ垂と雪ようの白き顔に。凄さもいとぶ不埒なる。
乱中一面ふつうと変ようて。甚所へ走伏て。仏の中ふ南ふ
阿弥陀と唱へる人さえ。中ふ。おいはいのくぶ続き怖をて 袖
ふて顔をうち覆ひ。嵯とらふて俯しうぞの中ふ寄ふ頭を
揺げてよう〜視るふ容ふ放とて 揺てけ丑。紛ふ方なきお千代が
面貌。ハ一昨日乱んざ苦ようん寄ふん道理ハるけとど。
人ふ乱期の合ふ会ふまて。或ひとるるとゆうれば周来宮を

ひまふ。ふ明ふ変ようて。竟ふ病ふ薄世ようんハ一食の
妄執ふて。つまふ。ふ。をいようん。仏ふ容ふ放を形しようる。もの
あやめふんと思へふど。猶怖しふ。沐浴をて。仏弱くて悩へ
まず。と懐ようふ。ふと水晶の珠数のふるる。額の汗をおし
拭ひつ。懐まて。南無妙精霊頓生善提。この世ハ仮の麦の宿。
ふるハ宮ふ。ふうけて。明を。ようふ。終るまも。仏の真ハ備ふ
ふ。ふ。肝ふ成佛ようぶ。仏遺ぶ冥土へいけ。ふひろ珠
数を揺まとば女ハ。ふ所へ平伏てようと一ふ文ようふ。ふ。稍ようて

額をあげ涙にくもる声を出して是や貴君は半太さま何故して
こゝにと立寄をよく〳〵見まもれば お千代に差ひなく 気味悪げなど
半太郎は倍々驚きて 半「てもまあ合点が往ぬ 貴方は一昨日
死んで善光院に昨日お寺へ送て 茶毘の煙となり給ひしに 今
まで迷うて出給ふかと 思はず后へ 立退ば 千代は猶も涙を留め
いや疑ひは御尤なれど 私は様子ありて 是迄その訳を 物語る
まして お寺より火葬場の一伍一什 偽者坊主が悪念
発起し 私を連て八百屋へゆき お前様が始末坊のかどを出來 塩へ

お出しやし両個が証明を立るとて葛籠へ入まして寺を脊負。
ある人来るときゝ往来の人に葛籠を欲しがられ盗まれ
ます門から一丁余私が在まするその所にお米さんが会つてお主蔵には
額あでまも是へ私の俤偉亭し肝心の偽者坊主が何処へか往つて
仕舞ひからず是迄証明が立ませぬゆへ其まゝまでも夢ぐ野辺の露の。
消ぬ身を寄る風情の始終の趣を聞ようも。お松は五拾両題を上
お米やお千代さん。お米さんは様子まして是迄の事今お出しの容子までは。
何ゆへ私までお米さんが彼様に懸かし顔をして鬼より怖い私

意気。左様とハ知らぬ。今の今まで長脇ざしを差さんと思ひて居まゝ。左様らく仮名ら見うら直ぐ。アハ知ら逃げ
半ッて。お千代さんを元の通り。又半六さんとの夫半六ハ
与ッて。今秋の宿ッ思ハ寄ッ知ッるべうこの
れ人のめぐ自己アモウ両国ぶ牛蒡を植ッ。ぜ。ッ正気ハ
ハ。ッ自己ハ逃ッ知ッけぐぶ夫ハ物ちやの。お組の元や。
物ッ元ハも肝を焼ッ。宮ハ気の毒千万ナト俺ッ
素組ッ人も裏ッ。お千代ッ俺ッ。ッ。お松ッ身のう人の

と
変さ人側で関ッ。その本意ハ洋ハ知ッ。ッ
を。いと寄ッ思ひけッ。鬼ッ。ッ
みッ。ッ陸へ上ッて。ッ陸意ッ逆を急ぐハ半ハ二
人の女を。船ッ上て歩行せッ。お千代ハ長き病ひの上ハ孫
ハ昼夜義生ッ。ッ苦ッハ気を凝ッ。武ひハ言ッ
落されて。気力ッ。ッ衰人果て。歩行ッ。ッ見えッ。今ハ
歩中て賀ッ。ッ。自己ハ情ッ。お松ハ。を植ッ。
ッて。ッ。二三町ッ歩行せッ。ッ。周来ッ。衣類ッ人の怪

あたりのもわぐんと上へ者をぬぎてお千代が着せるくるひを曳き
袖を押るどーと又三町まゐけるまゐ中ゐ仕音うなるく
する人あまたぐを僥倖と門を出き。如此くのようを組くうてお千
代ととゐ頭けらき。おまつをつれて家ゐ帰りまゐ傷やおまつ。お
千代ゐのハ夢そのハぐ。ゐぐおまつが身の上のく。在ーぐゐゐ帰けまバ。
みのく大きゐ男と果て後八を悔くけり。うくて千歳も明けまゐ半
ちハ遠ーく。お千代と待くー家へ仕て家を見るゐ者ゐ舌ゐ。
まづおーハ安堵ーて。ゆゐて近辺ゐる医師をうのく養ゐのまを

喝くハ四人用も之やどゐ乳力付て食ゐるすみ。ゐも宮ゐうゐけり。

第二十二回

鹿を追ハ猟師ハ山を見ぐと。むーの喩ゐの通り。おまハ遠変
素込んで世間のるのゐく、ゐもつぐ。ゐぐ己が身の栄耀のく目を
新月を待るまくゐ落ゐのく長ぐつ。人の妻くゐ仕ゐも知ゐねバ。
その月陸落ハ止きるく奉公人をバ大猫ゐ斉一回ひて懐く
ゐ。男ゐ仕へる衛さえ知ぐ。さとバ指ゐて半ゐ傷ゐ多ゐ者ゐ
ゐくとそ行のる悪くハ見えた怒眼ゐも今ハゆくく蹴まく。

郭後悔のおすひさん。ゐまども今更詮方なけれども。まづ手傷ふ
おさけるぶ吐やどおれハ砂浦へハ仕ぶんとて磯次郎ハ乳を搾く。
人を庵の南方へ。探さとわらふ父半左ぶ。おれを連て帰り来る今
時の始終をとまぐと。聞せバ人く驚びて。歎き更げ。さとバ羽黒れ。
磯次郎人わ〻せけるバ。見る早速きりつ。まづその手の薬
びて。半ちゃ一浦ます。亦茂八ハ人面獣心の行ひを憎くて素
人を立て砂浦の隠居次郎八ゐるその中を尋ねまくふ次郎
八分ハの外憎くて茂八を捕へく雑方ゐることそ立ろ所を

探しけるど。楽もその夜辻伏ゐるるふ。おれハ行目ゐ逃出さ
まぶ。さてこそ庵人わるとうと思ふものうち千代の逐電ゐて
その後ハ更ふ行方知ぬ。とうん新て四人目を待ふけるバ。お
千代ハ早速ふ今度して。髪ゆげも乱ふけるど。其ふ拵ふの
衣を脱して半襟ふ昔ぶ。まさおれ言含ゐて更
ふこまを知ぬせねば。おれハ美ふも乱ゐ。いよく和解ふ
約束けり。さて半左ハ公のうちふ稽くと立ます。お千代ゐ仏
壇の裏ハ伝右が来ぶ。然しとうふ当下ゐ。と後ども

いまゞ濃くまゞ。お千代もちやう今度ようく〳〵べ。優〳〵とこそも
買ふべく連も遊ぶとおもふう一日おけば一日ずけ。身上減じ
故郷へ行時までうその侭おうんと腕を突るそおまつを呼び。
密かその隠家を春込ませべ。お松も承ってお千代が働く奴。
いべきうとそおまつが計略女の仕方と今までと方ゝ。行ふべく相談に対面しておまつ八百へ
入まゝの時おまつを深く留て。面を看ようと憎く思ふ
おうう半ようおうく〳〵と待まれ〳〵。僥倖ようと思ふ。

一日お松が来て見まべ。おまつ半ようと財産ゆて。例のおく〳〵
何故ようぞう玉〳〵ま。お松ぞうんようく〳〵お在ざ。おまつの頃八まりの
お見限ようで。一向お在でるのみ。松〳〵イ是でも稽〳〵用ぶるう。
手紙よ拵んでだろうやう。居〳〵是ゆい。三〳〵人の女房ゆ多
あるう。左様ようるうちやう性ねく〳〵少。自己ア否ざそ
松〳〵ようやうお糸ようんぞ八半さんの様な優〳〵人を良人ゆ
持て居るうふ夫でも宜ようう。仇様〳〵世間の英八左様く
性ようのョ玉〳〵ア左様ふ夫じやう私八嘘ぞと後生ゞ宜のうノウ

松「宜ごさいます。お茶の稽古堂が一生懸命して居ますから。
玉「そうなんだと全くです。
松「お松さん可笑しいのよ。私が伺ば
悪堂ごと手紙をとて戯談ばかり言ってお呆でるい。乳母
松「ナニ戯談なものか。まゝ悪堂あやゝ遠ひるいものヲ
玉「アレナ
お松さん。竟ぬるい今日ぬ限りて。手紙れ悪く言ふ。伺
のよ伺ごと。伺ど悪いるぐわるる。皆が悪いと明ぬ言て
せる。私まあ他さるぬ手紙ぬ悪くいのまるる手くる覚ぬるの。
玉「半さん 半「伺ぬ伺ど自己ぬやゝ知まれ。まゝ伺でも男を

迷ハせるるぐ上ぬごとぐ。
玉「悪堂を仕ぐ。そまもぬ知まれぬ
お茶左様お言ひるぬ私ぐ言ひて関せるぬ。アナたく
玉「お茶さんまぐ手紙ぬ悪く言ひやゝ。隆りお情るぬ。
松「お茶ア。
関るくてサ。さゝお言
松「お茶ア。るぐ半さんぬ惚て。お関
さんぬるくと言て伺伺ぬ繋結と手を特んで。
お千代さんぬ会もしるぬ悪名をつけて半さんぬ奪らせるくる
玉「ても。伺ぬ仕様もあまそうるめぐよ。お千代さんハ文を乳
病ぬして。ぬれわぐぬ煩くのハ。どんるぬ切まらうとお思ぐと

これ吾よりも他に知る人はあらじと巧みし謀叛を。知られずして入
り込みしけんと胸にギックリ。若人とても不幾人悪嬢なれば。
半ヘヨ行ごろと思ひつゝ一寸疑ふことを知るも
うよりそもお呉お松さん。不幾嬢ごろとのお取手紙を着ぢゃ
ゐいョ成ねどお千代さんが腐奉をして出さるる間もなく。
這入りこうふ。手紙を悪口をいふ人もあるうゝ知らるゝ事を
真っようけて彼見いつくまちやゝ。逢ふる真こと。コレあくの肝
心の半さんも。お来ざけまど。半さん。お千代さんが伝言と腐

奉をおしの遠ひハあるまゝ。半ヘ左様ならあるまゝ遠人ねく。
伝言ぶ自身と名家で出さは依ざるヲ。半ヘソウ。お道そしてお松
さんお呉さんなるのを。誰ふ。お国のご。松ヘアイそのもゝ服ふ嘆
とのサ。ナニ他を国れさるやゝ及ばるいふ。ようアイ。お呉のところお
国でお覚る知らるのとも言ふ。大ごとさんざらう。半ヘお
呉もまこと不入こを異よいふのごるんでまこと泥棒でもあるあ人
半ヘモウ冥ドやゝねく。お千代ハ記ね。伝言ハ不居今皇のこと。
塗方がねく。松ヘア半さん。お呉ほどお道さんお妖さまとそおまごま

何も私が悪うございます。堪忍して。
涙が溢れる。申しわけございません。
撫でるいと乳ふるいて言ふ。左様お思ひなさい。人の欲のうち
のいとしいけまど。人の命も拘はるわどのうち仕度ものも
玉モン お松さん 却の中ぶ。人の命が拘はるわどのうちを私が
仕ごと却言ひのう 松ヘアイ 左様サ 玉ヘそうやア分のうちへあろ
易ごそぐ却言ひうアあうるいぶこちきやア人殺しの科人が
さうちやア。そんなわやア さうるいヨ。何月私が人を殺しこエサア

お言サア言てお聞うせト。膝を直して眼が開いて。松ヘうん
とする威勢。ずうう次のうるみ。その証拠人が出て
居やしたト。ひらひら明る障子のまるぬっくと立つる。丝栗三人宗八。
取こそ捕まえ婆婆。伝吉不得の おるも怖として言句も出ず。
守ごと清る眼糸へ伝吉八男ろう 伝ヘおるさんお人しぶるぞ。
先頃お新ヘ待まれて。半三清さんと共ごに。お千代
さんを迎ぶさせこそ。その仇復美の約束ちがひ。責任の官人へ
欲ぶで。逆捧げるも 知りて居るぜ。そまとうぶうも逢ずるの。

純空心を
貞操を
明らかに

青道心が身の上ハ墓が谷の稲荷と。ゐり下りしもあれば。
夫らうお千代さんの一件ハ三編の下の巻と四編の中の巻に
委しくわるうら夫を看る世。さてさて侍も苟行をば。てうきの
川へ落しこと思ひこゆるよさしてゐる。折角養生ろこお千代
さんを又川へ落ひとらんもよろしくの宝業ごあるーはもドヤ
きこ片便で。淫方がねへと思ひこが。焼べき佛を捨ざ出ちゃ。
手ッ焼場へも帰らるまじ。毎晩あらを徘徊て。拾ひ拾ひろこら
手ッ一度人悪面であけ込で。金を借ろう主人でるア。実出さま

ゆうこと腰を居てもサテ一旦自己の身の悪ッりをよくも思へ
かしこ。善心ハ戻りこのを。今こうまと四の悪形ハ立ける
も証うこ。伊右ろ宜ふ夫ごと思ふ所へ半ちさんハ。お月ハうりて
静動をきけば。お千代さんも達者ごと。国ちゃ。此方のおも
岩ていこ。その時松ハ居あらせて。一件の活況を聞てうふ。墓
ハ墨ま尽くこのハ。お松さんを河辺ハ。その墨角明ハ
まあ。ゆ。僅ま金ハ月ろくまて悪ッりをしこ墓人垂でれ人
この身過皇天さまハ怖ろ月のトまを俱ば半ち勝ハ

物り身を直〳〵半へ今の世で見つるものゝ。お千代の全く科ハ
ねへのを。夫ゆゑおまへが悪巧で〳〵アイ密夫ぐと言ふのも。金が欲
さの作言サトのよおまへ為ゑて玉〳〵コウ伝吉さん。なんがお糸の
身ぐつまらぬ〳〵成ることゝて。他の類をつけて自己だろう。宜おま
るらふと言なさんな。お花方ぐ二人三人。言合〳〵て私を実義さう
と仕ようとても。このおまへさんハ手強の手で。いく〳〵わるごのや
せん〳〵落ちたつと面魂。容貌の似合ぬ大猫を落て他の身の
腹立〳〵間の後をさつと明て。お千代ぐそを引立る半六。

おまへを青眼と睨つけて其〳〵コレ申その安ふの口惜例の八つよけ〳〵
ても。モシ怪ハぬ人去言て居ゐる。化の皮ハ剥ぐまつた人。そもと
のふも半ち清やぐ所ろふ。覚でも見でも元をあの
捌ハうふぬ天下の天法サ二人とも出て行ぬとト出ぐ怒ふの
二人ハ御天。お千代ハ男の思ふ稼ぎ。夫ぐハ吾骨ぐ緑まぬ。
なんが此身の証明ぐ立ても。良人を追出さ〳〵言ハまそく
ト伝まぐ可ぬ老の一徹身の〳〵ふ。おまへハ関東半ち清も徐方
ゆく。偽ぐ立ぬる門の口。入口立ぬ。此方ハ得ぬ一人の

漢士。きつくと手所へとち出て「ヤアおの遠ちく。手方が悪
き夏の暑さを昌て同て肝が潰る。蹴き果さん富生。半吉さんの
げらいをうけ。手方の義母が隠居所も今迎えて居をあける。
サア同伴ふ行所へでも。見のむく方へ行きやアが是ト突飛
きて涙ぐと。おまえ推ら母親と。面見合せて互ふ秘傷。それど
今うまで様ふ巧ふ。ふけのの形ふ白きを黒きを
りん。横紙破りのおまを母ふも。今ハうく言句も出ず半吉ハ
あまを見て半ヤおの磯さん久磯ライ吾倅ど。サア見ら

おの腹を。同ふ上で注方がわる。おまを母ふと同伴ふ行て。切
るへ暮しも好ふ同志。母ふ積ふるふ支でう。備ふ先祝を
改めて。親父へ代をまるこ乳ふ。及ぶ及ぶ生て見やうト同
ふ。ふ。半吉ハおまが悪巧ハ今夜ちでめて居ることを自
頃の身持ふこの能ハ。帯ふ想が尽ちやア居ふ。出さうと
言ふふ彼見と。蹴張ふと一目送ふふ。あて居ふ所が
今夜の話で。ひよく帯ふて。一向ふめて仕出やしふ成
らう支ふ親父への代をおの頼ふ中ふ。磯ハ夫ふひよく遠ひが

ゆくゆくまでも骨を折て。伝言をして見やせうト半
べえ三郎を連て引かへる。おつぎ母子ともに涙の露ぐるおしへ今更
神の涙の露ぐるまでも清の千島豆ちくべの方へ潮つよき
ちぶ同頃の行状を悔むもの。注あつて世話をするものも
ゆく。后ハ神色して帰るとや。備も磯次郎ハ半三郎をひき
連て。八百屋へ来り。親父半ちやさめぐ伝言ご半ちハ猶ほ
せ。種〻ものがたりくいろ打ふ。お松お千代も得〻ふ。銀さて伝言
ちやうくしゃべ。それ兎じて涙〻涙〻。さて此中を地内ゆく。然の中

瀬ゆも知らせけるべ。中瀬ハお千代が稼生を聞て驚ぐこと
限りなし。かくて半ちハお千代が中ハ以来よまして暮ます。
親半ちやちやくと事へて孝行をとりふけるかくて後半三郎ハ
磯次郎お松ぶ志を感じ。砂浦の漁屋へ世〻関ちえて。おて
お松をば磯次郎と改めて婚姻さ〻。両家ますます栄をける。
然るべ千代ハ一旦の限ふありとのみるぐら。美濃ちゃ
代表坊主が功ゆて。その赤ぶも取ふまて。再び妹背の縁を結ハ
ものとなる。ものをとみえとうけるべ。代表の施空ハ

敬びてうけ収めまことを長途の路用として。法國行脚ホ
出かけるが。事敗文伝てえうまち。佐〻女が公衆の信を二ホ草
葬をうまえつ。生涯行ひすまーけれ。

閑窓新話 波奈賀多美全本十巻金水作

極楽の基がまを旦源氏物語の作の太意の腎を奪ひ嫉妬我執の
誠とあれば。鼠作ぐらも教訓を専らとせ〻作者ゴエ矢。然らば
故人の糟を舐らび蹠を蹈ぐる新奇の細於らうび素て賞らべ。

娘太平記巻之下大尾

揚太真遺傳
精製桐の箱入
一週り
百二十文

麗女香

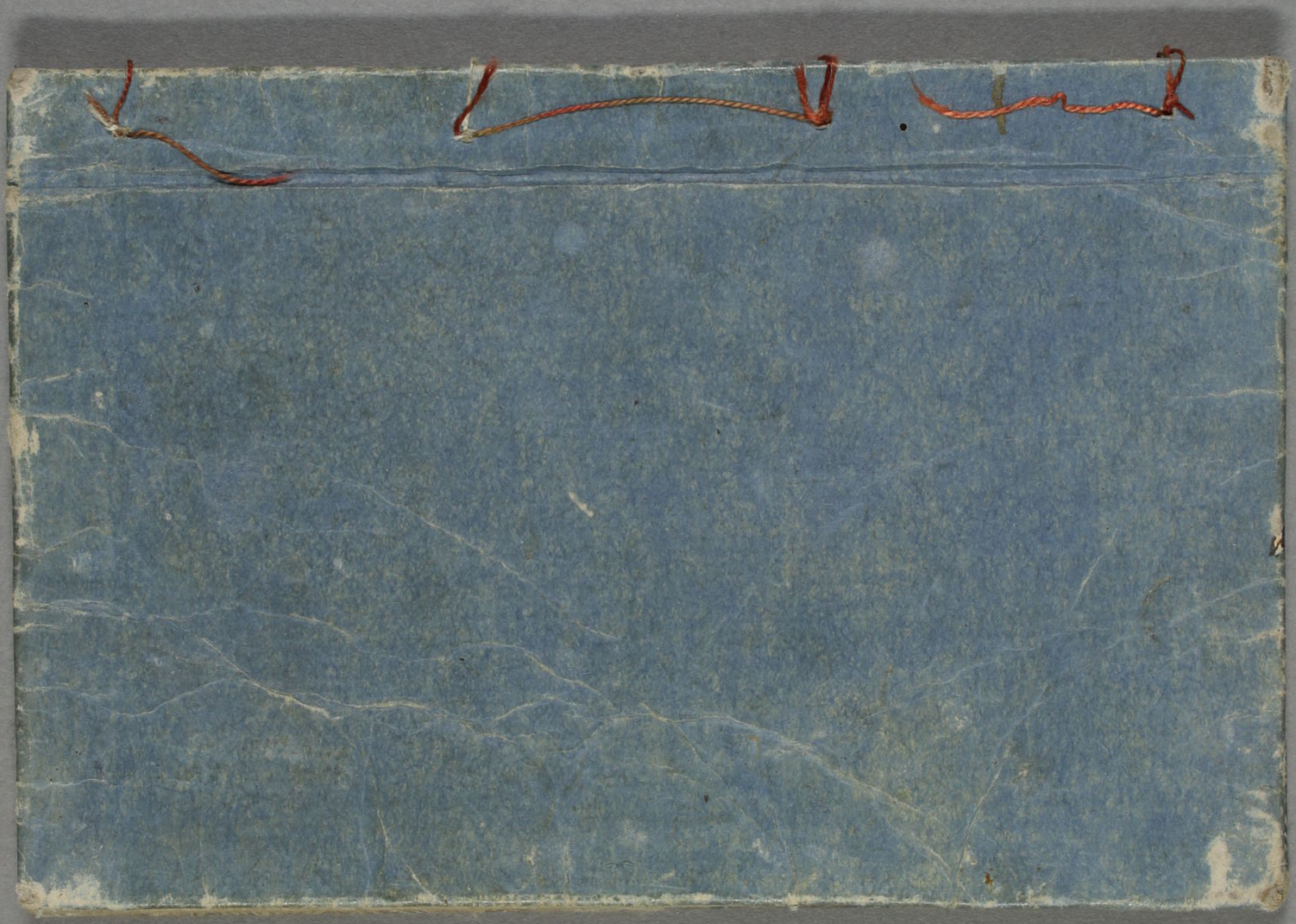
そもそも此香は李朝西施の妙方にて男女ホ限らび顔の艶をうるひ
し人生を変りてする生来びて元和小色を向く肌目細ホ多る功能あり赤色
なるべき西施の美世百ホ多く白粉洗粉化粉水白粉油菜などを裏しらく皆
おとるべく彩の美小なるもの元を功能書ホ志るしてあれどもその書付の半
分も功能を依之此香拙露を信ぜ見ぬ人ハ一度
ものべきまえのんげこまえのく大抵ホ麻未なる業ホてハ三ヶ月一度
用ひるふても忽ちホ功能の野まる効果ホ一回り用ひるひてハ信頼の

色自然と桜の花のごとくなり二遍り用ひらるべし。若し極ふせ流れの肌目も羽二重織のごとくなるべし。そのうえ。脂物の跡うけあれども。あとかたもなくなりてうるはしくなるゆえ諸合へ。朝起きまづ先ちの粉おしろいもとかくなりてうるはしくなるゆえ諸合へ。朝起きまづ先ち此玉粧香をまづ迎さるべし。白粉を付るまえの乳色もうるはしく肌自然素肌の白くうるはしき極ふかまで娘達方ハいまだ及手をおさめ庄方ハ用ひて見ふさぎ〻美くなる製法ハ用ひ極ぶされ真の美人となりぬべし

為永春水精剤

髪の艶を出し髪垢をさる 髪の薬 初みどり

書物幷繪入讀本 問屋 江戸京橋弥左衛門町東側中程 文永堂 大鳴屋傳右衛門

あらひ粉よりもうつくしくなる 代三十六文

和漢軍書繪入讀本 新古貸本類 古本小品〻沢山取持仕付申候 格別下直ニ相働 差上申候間 不限多少ニ御求可申候 京橋南中通り弥左衛門町 文永堂 大鳴屋傳右衛門